

# ネイチャーライティングから読み解く「ピーターラビット」

06K007 原 翠

## はじめに

「“I don't know what to write to you, so I shall tell you a story about four little rabbits whose names were—Flopsy, Mopsy, Cottontail and Peter” 「あなたになにをかいてあげたらよいかわからないので、4ひきのウサギのおはなしをしましょう。ウサギたちのなまえは、フロプシー、モプシー、カトンテール、そしてピーター。」」

*Letters to Children from Beatrix Potter* より

上記の言葉が書かれたジョサイア・ウェッジウッド・アンド・サンズによる磁器製品は、1930年代から『ピーターラビット』の公式認可製品となり、いまや世界中各地で販売され、一番の主要なキャラクターであるピーターラビットは、知らない人がいないと言って良いほどの人気を誇っている。『ピーターラビット』の作品もまた、すでに30近い外国語に翻訳され、世界中の子どもから大人までを魅了する絵本の一つとなり、児童文学の世界で空前のベストセラーとなる。繊細で温かみのある『ピーターラビット』の作品の挿絵は、見る人の心を引き付け、私たちを自然豊かな『ピーターラビット』の世界へといざなってくれる。しかし、私たちは作者のヘレン・ビアトリクス・ポターのことはあまり知らない。

ヘレン・ビアトリクス・ポターの生涯を追うと、真のある、魅力的な女性であることが分かる。生前ポター（ヘレン・ビアトリクス・ポターを、ここからはポターと書く。）は、自然や権利を守るための政治活動に力を注いでいた。いつの時代も、美しい自然景観の土地は乱開発の対象にされ環境汚染に晒される。ポターは自然保護活動の先駆者として、ヴィクトリア時代のイギリスの封建的な時代に自立を求め続け、『ピーターラビット』を世に送り出した。

『ピーターラビット』の作品は私たちに自然に対する意識を持たせ、人間と自然とのあり方の見直しを促す。これまで『ピーターラビット』の作品は児童文学として読まれてきたが、動物たちが主人公である点と豊かな自然をテーマにして描かれている点を考えると、環境文学的な要素を多く備えた作品であることが分かる。さらに環境文学として読むことで、これまでの『ピーターラビット』解釈では見落とされがちであったこの作品が持つ魅力や可能性が明らかになる。このことから、本論では作家ビアトリクス・ポターの生涯を概観しつつ、『ピーターラビット』で示される、環境文学的特徴さらには自然観を考察する。さらにポター作品の環境文学的要素を示す目的で、現代の環境文学の代表的作品アニー・ディラード (Annie Dillard, 1945) の短編 *Living Like Weasels* (1982年)、さらには環境文学の古典ともいえるヘンリー・D・ソロー (Henry D. Thoreau, 1817~1862) の『ウォールデン』(1854年)と比較しながら分析を進めてゆく。

## 第一章 ヘレン・ビアトリクス・ポターとその自然観

### — 自然保護活動の先駆者であった女性 —

いまやピーターラビットのキャラクターを知らない人はいないと言って良いほど、『ピーターラビット』の作品は世界中で人気を誇っている。あのB6版の小さな絵本は、彼女が指定したサイズであり、挿絵を多

く入れ、前編カラーで、子どもでも持ちやすく、誰もが手に取れるような価格にしようと計らった彼女の願いが込められて仕上がっている。その結果、出版からまもなく現代に至るまで、世界中の子どもから大人までを魅了する絵本の一つとなり、児童文学の世界で空前のベストセラーとなる。

日本での人気も、本国イギリスやアメリカに続くと言われているが、私たちは作者のヘレン・ビアトリクス・ポターのことはあまり知らない。彼女が優れた水彩の風景画家だけでなく、何百種類にのぼる様々なきのこを植物学的に正確に描くボタニカル・アーティストであり、農業に従事し牛と羊の飼育家として、特にハードウィック種の羊で多数の賞を取得し、湖水地方で広大な土地を買って国民に残してくれたおかげで開発をまぬがれた、自然保護活動の先駆者であることを知っていたらどうか。

ポターの生涯を見ると、ヴィクトリア時代の封建的な時代に自立を求め続けた女性であると同時に、自然とのかかわりを積極的に求めていたということが分かる。さらに彼女の自然への関心そしてナショナル・トラストへの貢献が、『ピーターラビット』の作品の背景に大きく影響している。

## — 青春時代 —

青春時代に、ヘレン・ビアトリクス・ポターは、後に彼女が自然保護活動の先駆者として活躍する大きな鍵となる二つの出会いを経験している。一つ目の出会いは、春の小旅行と夏の長期滞在を自然豊かな避暑地で過ごした湖水地方との出会いであり、もうひとつはナショナル・トラストの創設者の一人となる牧師のハードウィック・ローンズリーとの出会いである。ヘレン・ビアトリクス・ポターは、1866年7月28日、法廷弁護士の父ルパート・ポターと、母ヘレン・ポターとの裕福な家庭の長女として生まれる。この時代のイギリスは、1837年にヴィクトリア女王が即位し、産業革命によって、黄金期として繁栄を謳歌していた時代である。ポター家のブルジョアジーはアッパー・ミドル・クラスであり、彼女の誕生は新聞でも報じられた。彼女は、乳母と家庭教師に囲まれ、当時の慣習の例外なくほとんど子供部屋から出ることなく育った。淑女のたしなみである絵画への切実な想いを寄せ、いつも一人で寂しかったポターの友達には、ウサギ、ハツカネズミ、ハリネズミ等の動物である。つまり、『ピーターラビット』の作品に出てくる動物たちは、彼女の大切な友達である。この出会いが、ポターの絵の才能を伸ばし、作家になる素地となる。また、徹底的に実態を見極めようとする研究心が、趣味の域を超え科学的な視点にまで才能を開花させている。作品の中で見られる細やかな描写は、この時期に培われたものである。彼女のこうした小動物への愛着は、ポター一家が春の小旅行と夏に避暑地として訪れる湖水地方の豊かな自然に触れることによって、自然全体への関心へと広がってゆく。さらにポターはこの湖水地方で、後にナショナル・トラストの創設者の一人となる牧師ハードウィック・ローンズリーと出会う。彼女は、彼が主張する自然景観の保護運動に深い共感を抱き、この出会いが、彼女が後に自然保護活動家となる大きなきっかけになったのだ。

## — 作家ビアトリクス・ポターと『ピーターラビットのおはなし』の誕生 —

ポターが20代初めから特に興味を抱いていたのは化石と菌類で、18世紀から19世紀の植物学の大流行と共に、当時は珍しく植物学的にきのこを描くボタニカル・アーティストとなる。後に自らの研究をまとめて『ハラタケ属の胞子発生について〜ミス・ヘレン・B・ポター』という論文を書き上げるまでに至る。だが、当時は学会に女性が出席することも、女性会員も認められなかったため、彼女は菌類研究家への道は諦めなければならなかった。そのことが、作家ビアトリクス・ポターと『ピーターラビットのおはなし』誕生への道を開くこととなる。

『ピーターラビットのおはなし』<sup>1</sup>の主人公のピーター・パイパーは、1892年、ポターが26歳のときにシェパーズ・ブッシュ・アクスブリッジ・ロード市場で、4シリング6ペンスで買ってきたベルギーウサギ

である。ポターのお話に出てくる小動物は、湖水地方で出会った動物と思われがちだが、実はポターが幼少期からペットショップで買ったり、譲り受けたりして、ロンドンの部屋で大切に育てていた動物たちである。このお話の始まりは、1893年9月4日に、スコットランドのイーストウッド荘から、病床にあった元家庭教師で友人のアニー・ムーア（旧姓カーター）の長男ノエルに書いた手紙が元となる。“I do trust that your brother is not going to be very ill, I got scared before he went to Manchester, wondering if he had been drinking bad water.”「弟さまの具合が悪化しないことを信じております。私は、彼がマンチェスターに行く前に、悪い水を飲んだのではないかと、とても心配だったのです。」（『夢をあきらめない人生』65）その後も、バラエティ豊かなペットを飼っては、彼女のお話の中に登場してくる。1890年にクリスマスカードで、1893年に挿絵画家としてデビューを果たすと、絵本作家への道を模索し始める。

1900年、元家庭教師で親しい友人のアニーの提言もあり、ポターはノエルに送った『ピーターラビット』の手紙を元に絵本を作ろうと考え始める。自費出版に切り替えて、本の単価を低く設定し、前編カラーという条件が出版社に認められると、1902年10月2日、オールカラーの『ピーターラビットのおはなし』が出版される。この作品は翌1903年末までには50,000部以上を売り上げる大ヒット作となる。しかし、中産階級の淑女が趣味の絵描きに納まらず、実務的な製作に関わり商売として成立をさせることは、当時にはしたくないことであった。それでも担当編集者のノーマン・ウォーンとの純粋で劇的な初めての恋に落ちたポターは、世間のそうした見方に屈することなく、溢れ出すように作品を生み出し続ける。ポターは39歳になろうとしていたとき、ノーマンにプロポーズを受けるが、商売人と彼女の身分の違いから両親の反対を受ける。婚約していることを誰にも言わずに避暑地へ向かうことを条件にノーマンとの関係を認めてもらったものの、ノーマンが37歳という若さでリンパ性白血病で、婚約からわずか1ヵ月後に亡くなってしまう。ポターは悲しみを癒すために湖水地方へ移住し、ヒル・トップでの生活を始める。印税でいつか住みたいと思っていた湖水地方のヒル・トップを購入すると、さらに近隣の農場が売り出されると次々に購入し、ついに大農場経営者となる。『まちねずみジョニーのおはなし』<sup>2</sup>でポターは次のように言っている。“ONE place suits one person, another place suits another person. For my part I prefer to live in the country, like Timmy Willie.”「人にはそれぞれ合う場所という物があります。私といえば、田舎に住む方が好きです、チミー。ウィリーのようね。」こうした記述はポター自身の生き方を反映したものといえる。

## 一 自然保護運動家としてのベアトリクス・ポター

創作を続けるかたわら、ポターは自然や権利を守るために政治活動に取り組んだ。その一つとしてナショナル・トラストへの貢献がある。

1895年1月12日に、史跡と景観の保護団体「ナショナル・トラスト」が設立された。新井満氏によれば、ナショナル・トラスト運動とは「野放図な開発や都市化の波、あるいは相続税対策による見切り売りなどから、貴重な自然環境や歴史的建造物などを守るため、国民から広く寄付金を募り、その土地や建造物を買収したり、保存契約を結んだり、寄付を受けたりして、保存、管理、公開し、後世に残していこうとする市民運動」であるという。さらに「“ナショナル”といっても国家機関ではなく“国民の”という意味合い」がある<sup>3</sup> ナショナル・トラストは、緑地保護運動等をしていた弁護士の手・ロバート・ハンター、貧困層のための住宅改善事業等の社会改良運動家のオクタビア・ヒル女史、そして湖水地方の牧師で社会活動のハードウィック・ローンズリーの三人によって設立された。三人目のハードウィック・ローンズリー牧師は、16歳のポターに、「自然の保護と保護に対する信念」を説き、彼が亡き後も彼女がその遺志を継ぐ

までに至った重要な人物である<sup>4</sup>。彼は、自身の妻のイーディスも絵が上手だったことから、ポターの優れた絵の才能に強い興味を抱き、深い知識を有していた地質学や考古学についても論じ合いを重ねていた。

ヒル・トップの農場を手に入れ、ソーリー村で暮らし始めるようになったポターは、愛するソーリー村や湖水地方を舞台にして次々と生活に根ざした作品を描き続ける。土地取引に関して破壊される自然・景観の保全に共に取り組んだ弁護士ウィリアム・ヒーリスと幸せな結婚もした。ポターは生涯、ナショナル・トラストへの多大な貢献をし、収入をつぎ込んで土地を購入し、歴史ある家具や文化を残すことに努めた。ポターは、1800年代から1900年代初め、女性が社会でリーダー的活動をすることが考えられなかった時代に活躍し、ヴィクトリア時代のイギリスの封建的な時代に自立を求め続ける。努力が実り、戦争中にもかかわらず『ピーターラビット』の作品は好調な売れ行きを期し、ポターはその印税や農場で得た収入で次々と土地を買い、死後、4,300エーカー（約526万坪）の土地と、15の農場とコテージをナショナルトラストに寄付することを遺言に残し、夫のヒーリスが忠実に実行する。ピアトリクスに賛同していたヒーリスも死後、約31万坪の土地と6つの農場、家をナショナル・トラストに寄付する。

またポターは優秀な農婦として、牧羊の仕事に熱中し、1899年に「ハードウィック種綿羊飼育者協会」を設立し、保護、育成活動に力を入れる。1924年には2,000エーカーを越える大きな農場、トラウトベック・パーク農場を購入し、何百頭もの羊を飼育出来る農場を得たことで、湖水地方随一の農場主となる。次第にポターは絵本の世界から手を引き、牧畜に専念したくなる。1930年に『こぶたのロビンソンのおはなし』を出すと、創作活動はやめるつもりでいた。She was lovedの中で、ポターは以下のようなことを話している。“I think you'd smile to see me aged 98—how I grope about, trying to pick up dropped oddments and my back bent over like a crab doing a cake walk but like you—keep smiling!”「98歳になった私を見たら、あなたは笑うでしょうね。まるでケーキウォークをするカニのように曲がった背中で、落っことしたがらくたを拾おうとよるよると手探りをしている姿一。でもあなたのように…、笑顔を忘れずに！」（『夢をあきらめない人生』115）ポターはナショナル・トラストへの寄贈も含め、克明な財産分与の遺言を残し、1943年12月22日の夜に静かに息を引き取る。ポターの遺灰は、生涯愛したヒル・トップの丘に散骨されたが、その場所は遺言により伏せられたままである。

現在、ナショナル・トラストは湖水地方の約3分の1の土地を所有している。この事実はナチュラリストのポターが、死後に土地を寄付しただけでなく、さまざまな形でナショナル・トラストを支援・協力し、湖水地方の自然を守ったことを物語っている。

## 第二章 ネイチャーライティングから読み解く「ピーターラビット」 —「ピーターラビット」の作品が示している自然観—

ピアトリクス・ポターの『ピーターラビット』の特徴は、自然や動物を人間の意識のままに歪めて描くことはなく、それらが生きる世界を自立した別の世界としてとらえているという点にある。そうすることによって、ポターは自然界についての実際の自然の姿と人間の意識のかい離を示唆し、そのうえで人間と自然の関係性を見直しといった環境問題に読者の目を向けさせる。たとえば、挿絵として描かれている動植物はどれもポターが年月と研究を重ねた上に仕上げた、正確な描写である。また、作品の主人公を今までペットとして飼ったり、自然豊かな避暑地で過ごし、そこでのスケッチや観察を基にしたピーターラビットやベンジャミン・バーニーといった動物を主体的に描いている。自然や動物を人間の都合に合わせて描かず、むしろ非人間的なくらいありのままの自然を描いている。ピアトリクス・ポターは『ピーターラビット』の作品で環境問題を取り扱ってはいない。しかし、『ピーターラビット』で示される、こうした人間中



心的ではない形で結ばれる人間界と自然界の関係性は、この作品が明らかに環境文学的な特徴備えていることを示している。同時に、ポターが深く関わる自然保護運動の根底に流れる自然観と共通するものである。

『ピーターラビット』の作品の発表より少し後、19世紀ヨーロッパの芸術は「ロマン主義」の時代であり、自然は人間の自分の精神を反映してくれるものと考えられていた。例えば動物を、人々は人間の意識を投影して動物を見て、動物をありのままに見ることを忘れてきた。人間が主体がであり、動物は客体ある。しかし、『ピーターラビット』の作品は、ピーターラビットやベンジャミン・バーニーといった動物が主体である。ポター作品は、人間が動物を自分たちの意識で捉える事は出来ないという観点に立っていると言える。

同じ動物を主体に描いてる作品で、ネイチャーライティングの中でも現代を代表する作品だと言われている、アニー・ディラード (Annie Dillard, 1945) の短編 *Living Like Weasels* (1982年) がある。この作品でディラードは、「人間と動物の差異」を根本的なテーマにしている。ディラードは、人間と動物は両者主体であり、人間が動物を自分たちの意識で捉える事は出来ないという、環境中心主義的観点に立って人間界と非人間界の関係を描いているのである。ポターもディラードも、自然は人間の自分の精神を反映してくれるものと見ていた19世紀のロマン主義の姿勢に異議を唱えるかたちで、人間界と自然界の関係性を描いた。その中でもポターは、ネイチャーライティングの中でも現代を代表する作品だと言われているディラードの作品よりも、80年も前、しかも環境保護運動が社会で活発化する以前に『ピーターラビット』作品を出している。このような点を考えても、『ピーターラビット』に見られる環境中心主義的視点は先進的なものであったといえよう。

## ー 本論でのネイチャーライティングの定義 ー

ネイチャーライティングの定義について、高橋勤は『たのしく読めるネイチャーライティング』の中に於いて、ネイチャーライティングとは、「基本的な定義に従えば、自然と人間とのかかわりを省察する「一人称形式によるノンフィクション」を指している。」という。また、「1980年代以降、アメリカには、ヘンリー・デイヴィット・ソローの作品を原形とする自然文学、いわゆるネイチャーライティングの系譜があり、それらを文学ジャンルの一様式として学問的に認知する作業が進められる一方、それを基盤として人間と自然環境との関係を再検討する方向で、文学研究が実践されてきた。」と記している。<sup>5</sup>

次に、スコット・スロヴィックは『アメリカ文学の〈自然〉を読む』の中に於いて、ネイチャーライティングとは、「アメリカ文学における〈自然〉と〈環境〉への新しい問題意識が、ネイチャーライティングというノンフィクション文学の新しい枠組みを基礎とするかたち」と述べている。さらにスロヴィックは、「ネイチャーライティングの世界はけっして自然や環境との安定的な関係を至福のように反復している」わけではなく、むしろ、「そこに開かれる経験の場では、〈自然〉との接触を介して、たちまち人間的なものの属性が問いに付され、文化論的にも理論的にも激しく揺さぶられる。そのような揺さぶり葛藤こそ、〈自然〉ひいては〈環境〉との関係を再考するための大きな契機となるはず」と記している。<sup>6</sup>

さらに、野田研一は『自然を感じるこころ』の中に於いて、19世紀のアメリカ作家ヘンリー・D・ソロー (Henry D. Thoreau, 1817～1862) の『ウォールデン』(1854年) は、「自然保護や環境保護の思想バイブル」と呼ばれ、ウォールデン・ポンドの側で2年2ヶ月の独居生活を経験した記録であるエッセイ集には、「自然と人間の間にはこのままでいいのだろうかという問いと不安が充ち満ちている」と言っている。この実体験に基づいたノンフィクション・エッセイであるソローの『ウォールデン』こそ、「ネイチャーラ

イティングの祖であり、原型」であると記している。<sup>7</sup>したがって、以下の4点の『ウォールデン』の主要要素<sup>8</sup>を、本論でのネイチャーライティングの特徴として定義し、ビアトリクス・ポターの『ピーターラビット』の作品におけるこれらの特徴と考察して、『ピーターラビット』の作品における理解を深めていく。

1. 語り手が作者自身であること。
2. 自然観察と文明批判をミックスさせていること。
3. 特定の場所に居を据えて、四季の循環を語りの枠組みにしていること。
4. 語り手と周囲の自然との交感を語ること。

## ― ネイチャーライティングとして読む「ピーターラビット」―

フィクションの『ピーターラビット』の特徴を考察してみると、ジャンルの違いを超えて、ノンフィクションである『ウォールデン』の4点の主要要素を備えつつ、自然と人間のあり方の見直しを私達に迫る作品であることがわかる。

ソローの『ウォールデン』において、語り手は一人称語りであり作者自身である。『ピーターラビット』の作品は、三人称語りであるものの、作品中の語り手の言葉には、作者であるポターの自然観や環境保護への意思がふんだんに盛り込まれている。このような意味で、『ピーターラビット』の語り手は、ポターの代弁者であり、作者自身と考えられるのである。『ピーターラビット』の作品には、時々ポターが注のような視点でお話のなかに（ ）（かっこ）として語り手として出てくる。例えば、1904年に刊行された『ピーターラビットのおはなし』の続きの『ベンジャミン バニーのおはなし』<sup>9</sup>では、次のようなかたちで作者が登場する。「そこで、おかあさんは、うさぎの毛の手ぶくろや、そで口かざりをあんで、くらしをたてていました。（わたしも、まえに、ばざーで、ひとくみかったことがあります。）それから、このおくさんは、せんじぐすりや、『うさぎたばこ』も、うっていました。（『うさぎたばこ』というのは、わたしたちが、らべんだーといっているくさです。）」（9）その他にも、自然の愛着等を三人称語りの視点で盛り込んでいるポターの視点は多く伺える。それは、以前にも記した、1918年に刊行された『まちなみジョニーのおはなし』においては、次のような形で作者自身の意見が述べられる。「あるひとは あるばしょがすきで、またべつなひとは べつなばしょがすきです。わたしは どうかといひますと、チミーとおなじように いなかにすむほうがすきです。」（54）事実、この『まちなみジョニーのおはなし』を刊行させる年の前後に、ポターのナショナル・トラスト運動は活発になり、湖水地方の文化的に価値ある土地や農家をどんどん買い取り、ヒル・トップという田舎に住居を移している。こうした経験をから得た自然観を、ポターはこの作品にしばしば登場しながら、読者に示しているのである。

ソローと同様に、ポターも『ピーターラビット』の中で、自然観察と文明批判をミックスさせている。これは、1912年に刊行された、ソーリー村周辺の丘陵が舞台である『キツネどんのおはなし』<sup>10</sup>より分かる。直接的に文明批判をしてはいないが、従来の作品とは趣が異なるこの作品において、ヴィンダミ湖が直面する環境問題を示唆している。この時期ポターは、水上飛行機の騒音と危険に反対する運動を起こし、『田園生活』という雑誌に、「ヴィンダミ湖が飛行機の危機にさらされている点と、ボウニス湾とフェリー小屋のあいだに飛行機工場が建設されているという噂」<sup>11</sup>を活気ある長い文章で寄稿して読者の注意を喚起している。作品を仕上げるまでに、必ず丁寧に自然観察を行っているポターにとって、今回の作品の舞台であるソーリー村周辺の丘陵が、飛行機の開発によって、周辺の自然が危機にさらされている事態を重く受け止めないはずがない。『キツネどんのおはなし』は、従来のお話よりはるかに長く、歳月も掛かり、挿絵もカラー数が少なく、線描画が各ページに描かれている。出だしは、「わたしは、これまで、おぎよう

ぎのいい人たちのおはなしばかり かいてきました。そこで、こんどは 気をかえて、ふたりの いやなひとアナグマ・トミーとキツネどんのおはなしを かいてみようとおもいます。」と始まっている。飛行機という文明の危機がもたらすポターの悲しみや怒りが、挿絵のカラー数の減少や各ページに描かれている線描画に始まり、出だしの「いやなひと」という表現にあらわれている。最終的に飛行機工場は建てられずすみ、問題の飛行機もその年の内にヴィンダミ湖を去って事なきを得ていることは、『キツネどんのおはなし』のお話の流れに大きく影響していることが分かる。長い作品の結末は、主人公の「アナグマ・トミー」に「ベンジャミン・バーニー」の子どもたちが今にも食べられそうになっている危機的な状況から一転して、子どもたちは救われたというお話で終わっている。飛行機を文明批判する延長線には、『キツネどんのおはなし』を通して、私たちが人間と自然との関係を見つめ直すポターの「自然観」が顕著に表現されている。

『ウォールデン』のように、特定の場所に居を据えて四季の循環を語りの枠組みにすることはしてはいないものの、ポターは四季の変化やそれぞれの季節に生きる動物たちを何年も丁寧に描写している。例えば、『ティギーおばさんのおはなし』<sup>12</sup>は、ポターが28歳のときに、ペットのハリネズミの「ミセス・ティギー・ウィングル」に、スコットランドの避暑地で洗濯をしてくれていたおばさんの性格を与えたハリネズミが主人公で、ポターは単にスケッチをするだけでなく、ハリネズミの冬眠に関しても観察して、「冬眠は低温によって起こるのではなく、自らコントロールできる」と独自の研究による説を導き出している。このように、それぞれの『ピーターラビット』作品は、何年にも渡って動物たちを四季を通して見つめている。また、ポターは晩年の1905年からソーリー村に居を据えた後からは、次々とソーリー村をお話の舞台にしている。1905年の『ティギーおばさんのおはなし』は湖水地方北部のニューランズ・ヴァレイ、続く『パイがふたつあったおはなし』<sup>13</sup>はニア・ソーリーやホークスヘッドが舞台である。また、1906年の『ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし』<sup>14</sup>はエスウェイト湖、1907年の『こねこのトムのおはなし』<sup>15</sup>はヒル・トップのコテージが舞台となっている。さらに、1908年の『あひるのジマイマのおはなし』<sup>16</sup>はヒル・トップ農場とヒル・トップのコテージ、1909年の『「ジンジャーとピクルズや」のおはなし』<sup>17</sup>はソーリー村そのものが舞台である。ポターはソーリー村を「色彩の変化に富む丘陵、しずかに水をたたえる大小の湖、風の音の音を通り抜けるカラマツの林、夏になるとうれしげに鳴くダイシャクシギ。この地でより多くに時間を費やせる手立てを考えずにはいられない」と言っている。<sup>18</sup>ポターは四季の変化と動植物の暮らしの密接な関係を作品の中で繰り返し描くことで、自然界の営みを読者に伝えようとしているのだ。

最後の特徴として、『ピーターラビット』において、ポターは語り手と周囲の自然との交感を描いている。交感とは「人間と自然との間に何らかの対応関係を見出すこと」である。(野田 152)ポターの作品の中にもたびたび、このような人間と自然界の対応関係が描かれる。1905年にフィアンセを失い、その悲しみの中で書かれたという『ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし』(1906年)では、フィッシャーどんとカエルと関係が描かれる。作品の中で、みじめな体験をしたフィッシャーどんは、自分と同じように「たった一日の間に、釣り人として考える限りの不運にみまわれるカエルの姿」<sup>19</sup>に自らの状況を重ねて、カエルのおかれた状況を理解する。さらにポターの作品においては、こうした人間と自然界の対応関係はロマン主義的な人間中心的視点を超えて、環境中心的なかたちで構築されるのだ。

## — 終わりに —

野田研一は『自然を感じるころ』の中において、「1990年代以降の「地球環境問題」には、その取り組み方が自然科学系分野の問題だけでは留まらず、多面的にならざるを得なくなり、環境問題がグローバルな視点で見つめられた」と述べている。その理由を、環境問題が「関係とつながりの世界全体の破壊が進

行している」と捉えられ、生態系は、「地球上のあらゆるものが相互的に依存し合っている複雑な関係の網目」だとしている。<sup>20</sup> また、「環境問題に対処する策を判断する際に重要なのは、私たちに自然はどうあるべきなのかという思考的判断であり、またそのような判断を下すには、人類はいったい過去どんなふうに自然と付き合ってきたかという歴史的な知識です。」…「感受性や美意識こそが「自然観」の根底にあるもので、その部分を問わずに私たちの「自然観」を変えていけるのでしょうか。私たちが自然について何をどう感じているか、それを見極めないで、自然に対する私たちの態度を決定できるのでしょうか。」<sup>21</sup> とも述べている。つまり野田は、環境問題の危機感を私たちに提示し、私たちの意識変革を促す重要な役割を担う手段として、感受性や美意識を表現する文学や芸術が果たす役割の重要性を示唆しているのだ。

ビアトリクス・ポターの『ピーターラビット』は、自然や動物をありのままに描くことで、自然と人間とのあり方を示している。人間界と動物界を自立した別の世界として見ることによって、人間が自然や動物をどう見ているかを示し、そこから環境問題に対処する策を見出だす、『ピーターラビット』は、児童文学という枠組みを越えて、ソローの『ウォールデン』同様にネイチャーライティング的な世界観も備える作品といえよう。繊細で温かみのある『ピーターラビット』の作品の挿絵は、見る人の心を引き付け、私たちを自然豊かな『ピーターラビット』の世界へといざなってくれる。それは同時に、私たちを自然への入り口へ導いてくれるかのようである。『ピーターラビット』の作品は、私たちに自然に対する意識を持たせ、人間と自然とのあり方の見直しを迫るのだ。

『ピーターラビット』は、すべてポターの周囲との関わりの中から生まれてきたお話である。作品の挿絵には、現実には即した残酷さをさりと言いのけてしまうポターのユーモアが隠れ、背景にはこんなにも濃密な彼女の生き方が溢れている。ヴィクトリア時代の封建的な時代に、ポターほど強く、また自身を生きた女性はいないだろう。晩年になるにつれて、ナショナル・トラストに力を注いできたポターは、「あるものをただ保護するだけではなく、その本来の価値を維持しながら、その時代と共に生きていくことができる、保全していくことこそが、大切なこと」<sup>22</sup> だと考えていた。この理念はナショナル・トラスト発足当時の3人の発起人が考えてきたことそのままである。時が流れ、歴史が刻まれても、「人類はいったい過去どんなふうに自然と付き合ってきたかという歴史的な知識」をポターは読み取り、『ピーターラビット』の作品を通して「私たちに自然はどうあるべきなのかという思考的判断」を提示し、環境問題に対処する策を見つけた作家だといえるのである。



## 註

- 1 『ピーターラビットのおはなし』(1902年刊行)  
ポターがかつての家庭教師の幼い息子、ノエル・ムーアに出した絵手紙を、本にして出版するために書き直したもの。それから百年もの間、いたずらなうさぎのピーターが、マクレガーさんの畑から命からがら脱出するこのお話は、世界中の子供たちを魅了し続けている。
- 2 『まちなみジョニーのおはなし』(1918年刊行)  
イソップ童話に基づく話だが、イングランド湖水地方が舞台となっている。まちなみのジョニーが住んでいるのはホークスヘッドの町で、いなかねずみのチミーが住んでいるのはソーリー村である。お話の中で言うように、ポター自身は断然田舎のほう好きであった。
- 3 『ピーターラビット紀行』 新井満著 河出書房新社 2002年 106頁
- 4 『ピアトリクス・ポター』 ジュディ・テイラー著 吉田新一訳 福音館書店 2001年 50頁
- 5 『たのしく読めるネイチャーライティング』 高橋勤編 ミネルヴァ書房 2000年 1頁
- 6 『アメリカ文学の〈自然〉を読む』 スコット・スロヴィック著 ミネルヴァ書房 1996年 9頁
- 7 『ピアトリクス・ポター』 ジュディ・テイラー著 吉田新一訳 福音館書店 2001年 141頁
- 8 前掲書 142頁
- 9 『ベンジャミンバニーのおはなし』(1904年刊行)  
『ピーターラビットのおはなし』の続きである。ピーターはあれほど痛い目あったにも関わらず、向こう見ずないとこのベンジャミンに誘われて、またもやマクレガーさんの畑に踏み入ってしまう。ポターは、実際にベンジャミンという名のうさぎを飼っていたことがあり、そのうさぎをいつも連れ歩いてスケッチしていた。
- 10 『キツネどんのおはなし』(1912年刊行)  
アナグマ・トミーとキツネどんという二人の悪党が出てくる。読者に最も人気があるピーターラビットとベンジャミン・バニーも登場して、大活躍する。今回の冒険では、ベンジャミンの子どもたちがアナグマ・トミーにさらわれるが、アナグマ・トミーと嫌い合っているキツネどんが、図らずもうさぎたちの救出に手を貸してしまうことになる。
- 11 『ピアトリクス・ポター』 ジュディ・テイラー著 吉田新一訳 福音館書店 2001年 171頁
- 12 『ティギーおばさんのおはなし』(1905年刊行)  
主人公のティギー・ウィンクルおばさんは、キティ・マクドナルドという名のスコットランド人の洗濯屋さんがモデル。ティギーおばさんも、実在のキティ・マクドナルドと同じように、小さくて丸っこい、腕利きの洗濯屋ですが、キティとは異なって、帽子の下にはとげを生やし、動物たちのきみょうな洗濯物をたくさん引き受けている。
- 13 『パイがふたつあったおはなし』(1905年刊行)  
ピアトリクスがソーリー村にあるヒル・トップ農場を購入した年に出版される。このお話には、ソーリー村に実際にある家々、庭、小道などが、そっくりそのまま描かれているが、登場する住民たちはみな動物。ねこのリビーがいぬのダッチェスをお茶の会に招待したことから、こっけいな騒動が始まる。
- 14 『ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし』(1906年刊行)  
ピアトリクスがエリック・ムーアーという幼い少年に出した絵手紙が元。この絵手紙は、ピアトリクスが家族と一緒にスコットランドで避暑をしていたときに書かれる。個性あふれる登場人物たちは、ピアトリクスの父の釣り仲間がモデル。たった一日の間に、釣り人として考える限りの不運にみまわれるカエルの姿が、ユーモラスに描かれている。
- 15 『こねこのトムのおはなし』(1907年刊行)  
湖水地方のソーリー村にあるヒル・トップ農場を購入してから1年たった頃に書き始める。この本では、ヒル・トップ農場の家と庭が、そっくりそのまま描かれている。トムとその姉妹たちが住んでいるのはヒル・トップの家で、彼らが遊びたわむれているのはピアトリクス自身が手がけた美しい庭である。
- 16 『あひるのジマイマのおはなし』(1908年刊行)  
ピアトリクスが初めて所有した農場の「ヒル・トップ」と、それを囲む村が舞台となっている。ジマイマは、実際にヒル・トップ農場にいた、卵をかえすのが苦手なアヒルがモデル。ピアトリクスも可愛がっていた牧羊犬のケップも、きつねの魔の手からジマイマを救い出す賢い友人として登場する。

- 17 『「ジンジャーとピクルズや」のおはなし』(1909年刊行)  
ソーリー村の住人たちは、慣れ親しんだ村の風景が本の中にたくさん出てくるので、とてもおもしろがっていた。また、ビアトリクス・ファンたちも、ピーターラビットやその姉妹など、前に出た本でおなじみの面々が、お店の客としてさりげなく登場しているのを見て大変喜んでいた。
- 18 『ビアトリクス・ポター』 ジュディ・テイラー著 吉田新一訳 福音館書店 2001年 144頁
- 19 『ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし』表紙カバー
- 20 『自然を感じるこころーネイチャーライティング入門』 野田研一著 筑摩書房 2007年 144頁
- 21 前掲書 146頁
- 22 『“ピーターラビット”の生みの親』 伝農浩子 徳間書房 2007年 127頁

#### 参考文献・映像

- 『自然を感じるこころーネイチャーライティング入門』 野田研一 筑摩書房 2007年
- 『ピーターラビットの自然はもう戻らないーイギリス国家と再処理工場』 マリリン・ロビンソン著 鮎川ゆりか訳 新宿書房 1992年
- 『“ピーターラビット”の生みの親ーミス・ポターの夢をあきらめない人生』 伝農浩子 徳間書房 2007年
- 『ビアトリクス・ポターー描き、語り、田園をいつくしんだ人』 ジュディ・テイラー著 吉田新一訳 福音館書店 2001年
- 『ピーターラビット紀行ーふたりで行くイギリス湖水地方の旅』 新井満 河出書房新社 2002年
- 『素顔のビアトリクス・ポター』 エリザベス・バカン著 吉田新一訳 絵本の家 2001年
- 『ピーターラビットの生みの親ービアトリクス・ポター』 エリザベス・バトリック著 おびかゆうこ訳 ほんぷ出版 1994年
- 『ビアトリクス・ポターの生涯ーピーターラビットを生んだ魔法の歳月』 マーガレット・レイン著 猪熊葉子訳 福音館書店 1992年
- [Return to the Annie Dillard discussion page](#)
- [Return to Mr. Sheftman's EWRT 1A Home Page](#)
- 『Living Like Weasels』 Annie Dillard 1982年
- 『ミス・ポター』 クリス・ヌーナン監督 角川映画 2006年

(卒業論文指導教員 平塚博子)